

鈴木大拙研究序説

——「大拙禪」の形成と真義——

橋 本 芳 契

目 次

- 一、はじめに——文化伝統の中から
 - 二、初期時代——釈宗演との邂逅
 - 三、中期時代——報恩の行業
 - 四、晩年——「大拙禪」の真義
-
-

一 はじめに——文化伝統の中から

郷土が生んだ最も偉大な宗教思想家で禅学者でもあった貞太郎鈴木大拙は昭和四十一年七月十二日、九十六才の天寿をまっとうしてこの世を去った。彼の妻で米人であったビアトリス・レーン夫人はそれより二十八年前、昭和十四年のおなじ七月、十六日に他界している。大拙は彼女と明治四十四年に結婚したが、前後三十年じかひその結婚生活は、いうまでもなく彼の英語と英文による仏教思想の海外普及に非常な便益を与えたものであったろう。同時に、彼自身が旧加賀藩の四家老の随一である本多家老に代々侍医として仕えた家柄に生れ、とりわけその父——名を了準と

言いのち良準と改めさらに柔とも称す——が儒学に長じたといわれるから、漢字漢文、従って中国の語や思想を得意とする才分を天稟として享けていたことも事実であるにちがいない。彼と同じく明治三年（一八七〇）の生れであり、長じて学友となり、生涯その親交をかえなかつた西田幾多郎——昭和二十年六月七日死亡——は、「明治の初年、語学と数学の教育に力をいれること金沢藩のごとき所は、江戸（東京）以外にはなかつたであろう」と生前述懐しているのであるが、この学問的伝統は、すでに前田侯歴世の努力によって旧藩時代から牢固とした地方文化勢力にまで形成されていたのである。西田のごときは後に「西田哲学」と称せられるすぐれた独自の哲学体系をつくりだすに至るのであるが、その師北条時敬はむしろ数学の大家で、これまた加賀藩数学の伝統の中から生れた人であり、西田が哲学の道に向かおうとしたとき、「哲学には文学の才が必要である」と注意したというが、一面西田の数学の才を惜しんでのことであつたに相違ない。そう見てくれば、加賀藩時代からの文化的伝統のうち、西田は数学の流れを汲み、鈴木は語学のそれを受けたともいえるであろう。しかも、西田と鈴木は後年共通して禅、とくに臨濟禅に学び、その宗教的特色を各自の学問の上に十二分に生かし得たことは、これもまた珍貴なこととしなくてはならない。もちろん西田も鈴木も決して伝承的な禅や仏教には満足しなかつた。中でも鈴木のごときは、禅の僧堂のうちに身をおきながらも、生涯、伽藍仏教に対しては批判的もしくは否定的であつた。西田のその点については別の機会に考察することとして、いまは鈴木大拙の生涯にもした述作の思想的な流れを追いつつ、「大拙禅」ともいうべきものの正体を明らかにすることにしたい。

現在までにあらわれた鈴木大拙の全面的な研究書としては、大拙の死ぬ二年まえに「現代日本思想大系」の第八巻として筑摩書房から出された『鈴木大拙』¹⁾が、ほとんどその唯一のものと考えられる。この「思想大系」には執筆当時の生存者としては大拙だけが選ばれていたが、そのことは晩年の大拙にはすでに一応の思想的完成の見られていたことを意味するであろう。ここではまず、その一世にわたりわたりわたつた全生涯を、初・中・後の三期に分つことと

し、順次、述作活動を中心に、その思想的研究のあとをさぐることにする。いうところの初期とは、彼の在郷土時代から、やがて上京し、とくに鎌倉の円覚寺に入つて今北洪川、つづいて釈宗演に就き、やがて又渡米の縁をもち、かの地でポール・ケーラス Paul Carus の著作や出版の事業を助けつつ、自らも宗教や仏教に對しいよいよ深い理解と思想的把握をとげ、ついに明治四十二年（一九〇九）四月、三十九才にして十四年ぶりに帰国するまでの約四十年間。また中期とは帰国後、学習院、東京帝大文科大学、大谷大学等に教鞭を執りつつ多くのすぐれた著作や文化活動をなした時代で、一応その期間は心友西田幾多郎を喪つた直後のこととなる昭和二十年八月までの約三十五年間。および後期もしくは晩期と称してよい終戦後の約二十年間としてこれを考えたい。以下、各期について多少その間、粗密はあるが、順序を追うて大拙の生涯とその学者としての業績を眺めてみることにしたい。

二 初期時代——釈宗演との邂逅

鈴木大拙は、本名を貞太郎と言い、明治三年十月十八日、金沢市本多町における出生である。彼の出生地については本多町以外の地名、町名を挙げるものがあつたが、北村三郎氏の精密な史料調査と戸籍簿照合により、また他にも大拙の生前における直話を現地で親聞している人があり、旧鈴木家跡に、「鈴木大拙生誕地」の建碑を有志協力で企画、実現し昭和四十二年六月十八日、その竣工式を挙げるに成功した。同年七月十二日の彼の一周忌当日より一箇月近く早いときのことであつた。碑銘の撰句と揮毫とを久松真一博士に委嘱し得たことも両先生の間における不思議な因縁であつたとしてよい。大拙の母なるひとは増（ます）といい、「也風流庵自伝」⁽²⁾によれば、「母親の真宗的に行動されたことは覚えていない……：……：……：秘事法門ちゅうほうの仲間に入つていたらしい……：……：」ということである。また同文には、父の了準について「医者で儒者であつた」と記し、その「父が亡くなったのは六つのころ」と記憶を辿っている。つまり大拙は四男一女の末子で、三人の兄は順に元太郎・亨太郎・利太郎と言つたのである。明治八

年、本多町小学校（現、新豎町小学校）に入學するが、この年十一月に父の死にあつてゐるから彼の記憶は正しい。母校には彼の揮毫した「平常心是道」の書が扁額としてかかつてゐる。しかし理由は明らかでないが、明治十六年この小学校を卒業せず、父の友人数田順の開く塾に入つてゐる。あるいは英語塾もしくは漢学塾であつたのではないかと考えられるが明確でない。一応学力をつけ得たからであらうか、ついで旧制第四高等学校の前身、石川専門学校の付属中学校に受験、合格してゐる。同校では藤岡作太郎らと同級で、明治十八年二月には大拙が編集者となり仲間であつたことは争われない事実である。明治二十年二月には前記中学校を卒業し、さらに学制改革で新設された第四高等学校予科三年に編入され、そこで西田幾多郎とも初めて机を並べ合うことになつたのである。他にも木村栄（ひさし）等があつた。しかし程なく家計の都合で中途退学のやむなきに至つたというが、そこに彼の数奇な運命が始まつたとも言えよう。まず明治二十二年十九才で能登（石川県）飯田小学校高等科の英語教師となり、翌年英語科教員仮免許状を得たうえで石川県美川小学校高等科訓導に転じ、約一年間在職した。その間、二十三年四月に母の死に會つてゐるが、飯田から美川へ転じたことにはそうした家庭事情もあつたことと考えられる。飯田は当時としては七尾市まで金沢から約八十キロを北進した上、同地から船でまた三、四時間を要したはずであり、美川は明治初年に一旦石川県庁所在地にもなつた当時の良港で、金沢からは三十キロばかり南であるが、交通便としては金石港（金沢市。古くは宮ノ腰といつた）から船で行けた。さて大拙はすでに両親を失ひ、しかも向学の志もだしがたく、東京に遊ぶことを考へて訓導を依願退職し、早稲田大学の前身東京専門学校に入つた。坪内逍遙に英文学の講義を聴いたといふことである。しかし例の退学くせで、しばらくの在學でやめ、今度は先輩早川千吉郎の紹介で鎌倉円覚寺の今北洪川のもとに行き、そこで参禪を試み、以後継続鎌倉の地におり、のちの「大拙禪」の完成を見るまでの根ぶかいつちかいをなすはじまりをなした。その頃、郷里からは西田も上京し来り、そのすすめで共に東京帝国大学選科にも学

んだ。但だ翌二十五年早くも今北洪川の遷化に会い、続いて、老師を継いで円覚寺管長になった釈宗演に就いて参禅した。その頃のはげしいまでの仏典、禅書、泰西の哲学書、あるいは老莊、儒教の書籍類の熟読と玩味が、大拙の思想形成の根幹となったものであることは察するに難くない。ちなみに彼は、さきの分ちでいえば晩期の最初に属する昭和二十一年に『今北洪川』を物し、昭和四十一年一月、詳しくは同月十日、鈴木学術財団研究員として筆者らが鎌倉に招喚された時も木版の「老子道德経」を片手にしての訓話であった。これもついでながら記せば、明治二十七年、大拙が二十七才にして釈宗演の推薦でアメリカのシカゴ Chicago 郊外に住むポール・ケーラス Dr. Paul Carus のもとに行き、ケーラスの關係したオープン・コート社 the Open Court Publishing Company で働くことになった時のケーラスとの英訳共力書中に「老子道德経」のあったことが注意される。

さかのぼって明治二十六年、釈宗演がシカゴで開催される万国宗教会議 The Parliament of Religion in Chicago World's Fair に参加の日本代表の一人として出席の時、その講演原稿の英訳を大拙にたのんでいる。たまたま、かねてより仏教について詳しく知っていたポール・ケーラスが釈宗演とじつ懇となり、宗演が帰国したあとにも円覚寺へ彼の新著 “The Gospel of Buddha” (仏陀の福音。この邦訳書名で大拙は翌年和訳出版した) の校正刷りが届けられ、大拙の校閲がもとめられた。さらに同二十八年師の釈宗演が渡米中の経験を語り聞かせた示唆をもとにして『新宗教論』を作り、翌年これを出版した。彼の自著としては最初のものである。その書名よりも、彼の関心事が仏教、とくに禅(具体的には禅宗)にのみ局せきせず、宗教一般に対し広く視野をひろげることであったことを知るべきであり、現にこの書出版と同年に「エマーソン論」(Essay on Emerson)を成していることも注目されるべき一事である。彼は明治二十八年の臘八接心で見性しているが、時に二十五才であった。つねに僧堂にあり、その恩義には十分ふかい感謝の念をいだきながらも、伽藍仏教に対しては批判的であったことは既述のとおりである。「禅宗」という用語法は彼の最もきらう所であった。彼は終生その墓銘にあるごとく「也風流庵居士」で終始した。その

母を「秘事法門ちゅうほうの仲間」に入っていたものと想像する大拙は、「秘事法門のある意味でいう洗礼を受けた」ひとと察知するなかから、「その洗礼というやつがすな。そのまあ、だんだん年をとってから宗教的な行動や宗教的心理というものを考えてみるちゅうと、秘事法門のやり方というものが、やはり一般の宗教的心理で解釈できるようなことになる」等とのべて、自己のその当時「新宗教論」に向かった動機やその意義らしいものとそれらの後における自由な一般的な発展の方向とを後年になって追想しているのである。「わしは、加賀の金沢に生まれたので、殿様は百万石で、徳川の幕府下でもすこぶるその重みをなしておったのですね。それで殿様は幕府ににらまれるということを好まないの、なるべく頼晦、というても今の人にはわからんかも知れんが、かくれるという、なるべく自分をかくすという風で、文化事業に熱心になって、政治というようなことには関係しないというので、金沢は自然にその文化的に開けたところです。それからまた、どういう具合ですか、蓮如上人時代、加賀のほうへずうっとこの真宗の開拓が盛んに進化したですね。……そんなわけで、北陸の人は自然に宗教心がある」と一般的にいったなかから、「わしのうちは禅宗でことに臨済宗であつたのですが、加賀は臨済宗はまれで少なく、曹洞宗が多い。そして真宗が強かった」なかでも、「母は別に特別の真宗信者でもなし、禅宗信者でもないが、仏教に心がけを持っておつた」「そういうことから、自然にこの母の感化を受けたというか、まあそういうことになつたわけでしようね」「そういうようなことで、宗教的な気分が十分に母親に動いておつたもんだらうと思う。そういう感化を受けたかどうか知らんが、自然わしも宗教方面に関心をもつようになった」と幼少時における母の感化のあつた事実をのべると共に、そうしたことが一般的にも大切であると記している。「べつに母が宗教の話をしたでもなけりゃ、どうしたこうしたということはありませんけれども、一種やっぱりこの毎月お経を読んでもらうとか、毎朝このお灯明をあげるといふようなことですね。」「そういうことが、この無言の間に子供の上に及ぼす感化がある」ので、「カソリックの今のやり方を見とつても、教育に力をつくすですね。そして、その教育に力をつくすにも、この女子教育に子供の時から力

をつくすというようなことも、自然そういう点から出たのかも知れんと思ひます」と言つて、アメリカやヨーロッパでの家庭教育の実際にも触れているのは、大拙が二十七才から三十七才までケールラスのもとに止まり、あるいは三十才（明治三十八年）のとき積宗演が再度渡米した折、その講演の通訳となつて大陸東部の各地を巡つたことや、三十八才のときオープン・コート社のあつたイリノイ州（Illinois）のラ・サル（La Salle）から去つてニューヨークに向かい、ほどなくヨーロッパに渡り、主としてイギリス、それからフランス、ドイツにもとどまり、ふたたびロンドンにもどつてそのスウェーデンボルグ協会 Swedenborg Society の招きにあずかり、自分そこに滞在して『天国と地獄』（Heaven and Hell）の書の和訳依頼に應じて精魂を傾け、ついに翌年四月、三十九才で日本に帰つた体験からである。海外にあること実に前後十四年であつた。いまは三十代における大拙の仏教研究とその成果について一言して、それが帰国後における各種の文化活動や仏教研究の一層の発展のもといふになつたものである点を明らかにしたい。大拙のアメリカにおける英訳の仕事で仏書について最初に手がけたものは、三十才のとき（明治三十三年、一九〇〇年）完了した『大乘起信論』に対するそれであつた。この翻訳は“*Ayavaghosha's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana*”の書名で同年出版されたが、当時以来ながく学界の注目を引いて今日に至つてゐるものである。この訳業が一方では七年後（明治四十年、三十七才）にメイン州（Maine）でなした最初の仏教講演がもとで、やがて名著として現在まで愛読される彼として最初の英文仏教書『大乘仏教概論』“*Outlines of Mahayana Buddhism*”（1907, Luzac and Company, London）となつて直接に研究上の発展的成果を示すことになり、他方では帰国後における彼の大乗仏典、なかでも華嚴経（*Gandavyuha*）や楞伽経（*Lankavatara*）の翻訳と研究にまで結実する遠い、しかし確かな機縁になつていたと考えられる。滞米中におけるいま一つの注意すべき仕事は、右の仏教講演や最初の仏教研究自著の出たと同じ時期にオープン・コート社の『モニスト』誌（*the Monist*）に古代中国哲学史に関する研究論文を連載したことである。これは日本に帰つてから大正四年（一九一四）に一書と

ついでに “A Brief History of Early Chinese Philosophy” (London: Probsthain & Co.) として刊行され、終戦後さらに志村武氏により和訳されて『古代中国哲学史』(昭和二十四年)の名で出版された。内容は哲学・倫理学・宗教の三方面にわたるものであるが、これによって大拙の初期における古代中国研究の全成果を一応概観することができる。そしてこの方面における基礎的知識と理解がもたくなって、後年の彼のほとんど縦横無尽ともいべき禅書の英訳と禅研究書の陸続とした刊行になり得たと考えられる。以上、初期時代の大拙は、(一)宗教心の原理的探求、(二)禅体験とその記述表明、(三)古代中国哲学書の翻訳と研究、(四)大乘仏教の基本的研究の各方面に向かつて広い基礎力の涵意にとめたことがわかるが、人格的影響は母と釈宗演ならびにポール・ケラスの三人による所が最も大きかったようである。他面スウェーデンボルグ関係の思想的影響の大きかったことも見のがせないであろう。しかもそれらの大部分が海外、ことに米国にあつての成果であつたから英語英文によることを主としたが、その辺に彼の生い立ちや幼少時における学習環境中の「語学」的伝統のいかされたことが見られると共に、釈宗演との邂逅がなかつたならば、彼の歴史にのこる尊い禅学者としての全生涯があり得なかつたことも知られるのである。

三 中期時代——報恩の行業

大拙がヨーロッパの旅からスエズを経て海路、はるばる帰国したのが、明治四十二年四月のことであつたのは既述したとおりである。これから彼の第二の人生がはじまる。アメリカでの彼の生活も決して容易なものではなかつたであろう。しかしともかくオープン・コート社を背景とする仕事はあつた。そしてこの外国の雑誌社における文筆の生活体験が、終生、大拙をして著作活動に没頭させる大きな原因となつたことはいうまでもない。しかもそのもとをたせば円覚寺における参禅生活と彼自身がとりわけ母から受けた宗教的感化の力であり、場合によっては彼が幼少時から貧困で学校もしばしば中退したり、英語の代用教員生活もしたりということが、古田紹欽氏のいう「雪間の草」

としての「大拙という人」（心誌、昭和四十二年十一月号）の本領發揮の原動力であったであろう。母と宗演を貫く精神的支柱の上に大拙の生涯を考えると、そこに報恩の行業が如実に見いだされる。大拙は帰国後ほどなく明治四十四年に四十一才にして米国婦人ビアトリス・レーン女史 Miss Beatrice Erskine Lane と結婚しているが、この人は昭和十四年まで存命して他界された。金沢市野田山の鈴木家墓地には累代の墓碑と共に大拙夫人の碑も建っている、大拙の生家は早くなくなっていたけれども、大拙は来沢する毎に野田山に展墓し、また墓守り宅（田畑新蔵氏）には常時つけ届けをしていた。それは直接には母と夫人につながる心でもあったろうが、本当はもっと広くて深い宗教心に由来するものであったろうと考える。晩年、鎌倉の松ヶ岡文庫に在住される頃、つねに愛猫を膝にいられたようである。愛の心、人を愛し、物を愛し、書を愛し、内外の思想を愛し、生物をも愛しつづけて大拙の生涯は終るのであるが、それだけ愛するものを失う悲しみには大拙にあって人一倍、大きくて深刻なものがあつたに相違ない。ここで中期時代とした明治四十二年から昭和二十年の彼が七十五才になるまでの約三十五年中に、彼は三つの大きな悲しみを体験した。ひとつは大正八年（一九一九）における恩師釈宗演の遷化であり、二は前述のビアトリス夫人の死、そしてさらに終戦の年における心友西田幾多郎の死であつた。ことにその西田は、大正十年春頃、当時大谷大学長であつた佐々木月樵と共に大拙の上洛を奨め、ついに同年五月から大谷大学教授として米任させることに成功したという恩義の人であつた。それまで大拙は藤岡作太郎（註、世間では西田、鈴木、藤岡の三人を金沢の三夕郎と称した）らの世話で帰国後ずっと学習院につとめていた。大谷大学は明治三十三年から約十年間東京巢鴨にあつたもので、その頃の学習院教授には大谷大学と兼務のひとが少くなかつたようである。筆者らが英語を習い、また旧制高校（四高）一年の学級主任としてお世話になつた林並木教授のごときも前任地巢鴨の大谷大学では晁鳥敏らを教えていられた。そんなことで大拙も学習院時代にすでに真宗（とくに大谷派）系の学者との交わりがはじまり、明治四十三年（一九一〇）佐々木月樵との共力で「真宗教義」 Principal Teachings of the True Sect of the Pure Land

その他の浄土真宗関係書を英訳している。翌年出した『自力と他力』の著作は、大拙の真宗教義についての最初の論文である。そこには幼少時から真宗(他力教)についての潜在的な関心と興味の、一応、禅という自力道における自らの宗教的修得からの対比研究に由来する顕在化と思想的整理があったものと考えられる。なお学習院教授に着任早々、雑誌『禅道』の主幹となり、オープン・コート社時代の経験が生かされたが、十年後に大谷大学に転じてからは、早速にもビアトリス・レーン夫人の協力も得て同大学内に「The Eastern Buddhist Society(東方仏教徒協会)」を設立し、季刊英文雑誌「The Eastern Buddhist」を発行しはじめ、この雑誌はその後二十年にわたって継続刊行され、内外の仏教学者を裨益する所甚大であった。大拙のスウェーデンボルグ協会との因縁は、帰国後も当分は切れずなきの『天界と地獄』の邦訳出版も明治四十三年のことであり、翌四十四年には同協会の招きでロシア経由で再度渡英してゐるし、また「The Divine Love and the Divine Wisdom」、「The New Jerusalem」、「The Divine Providence」の類の邦訳も試みている。さらに大正五年には学習院学生を引卒して中国に渡っているが、その後からららよ彼の「禅」研究が本格的になっていく。すでに大正三年には、英人ロバートソン・スコット Robertson Scott の主宰する「The New East」誌に禅関係の論文を掲載しはじめていたのであるが、一面、この英文雑誌との因縁が、七年後には彼自身に「The Eastern Buddhist」の創刊を思い立たせたものとも言えるであらう。とかくするうち昭和二年(一九二七)に単行本の「禅仏教論集」第一巻「Essays in Zen Buddhism」, First Series (Luzac and Company, London) が出た。筆者らが鈴木大拙の著書に親しく接したのは、昭和四年の暮頃、著者である大拙から昭和三年に大谷大学から四高教授に転じていた恩師木場了本先生へ贈られたものを個人的に示されたときであった。この書は英国で再刊(Rider and Company, London)し、米国でも戦後に再三刊行(Harper & Brothers, New York, 1949, 1958)され、その仏訳(Essais sur le Bouddhisme Zen, Premier Volume et Deuxième Volume, 1944)された。仏訳者なごホル・サウナンピエール Pierre Sauvageot とルネ・ダナム René Daumal によ

つた (Neuchâtel: Delachaux et Niestlé, 1944)。ついでながら、この書の続巻は昭和八年(一九三三)、同九年に同じく英国で刊行され、さらに仏訳のほか独訳も出た。それらの書名はそれぞれ左の如くである。

“Essays in Zen Buddhism”, Second Series, Luzac and Company, London. (1950, 1958 とも各刊行)

“Essais sur le Bouddhisme Zen”, Troisième Volume et Quatrième Volume. Tr, René Daumal (1944, 1946)

“Der Weg zur Erleuchtung”, Tr, Fritz Kraus. (Baden-Badew: Holle Verlag, 1957)

“Essays in Zen Buddhism”, Third Series, Luzac and Company, London. (Republished by Rider and Co., London. 1953, 1958)

こうした一連の英文「禅」研究論文集の出された時期に、大拙はまた「楞伽経」の梵漢藏三訳の対比研究に つとめ、昭和五、六両年には左記の諸書を継続刊行している。

昭和五年 “Studies in the Lankavatara Sutra” (George Routledge & Sons, Ltd., London. Republished in 1958)

昭和六年 “The Lankavatara Sutra” (Translated from the original Sanskrit. George Routledge & Sons, London. Republished in 1957)

“An Index to the Lankavara Sutra (Nanjio Edition) with the Chinese and Tibetan Equivalents” (second, revised and enlarged edition, 1934)

そして昭和八年には『楞伽経の研究』によって文学博士となっている。時に六十五才であった。その間、大正十五年には協力者にして恩人であった大谷大学長佐々木月樵の死に会い、また昭和四年には夫人と共に嘗ての参禅の地鎌倉に動物愛護慈悲園を建てている。そして学位をもらった翌年には、朝鮮・満州・中国の南北に仏蹟を訪ねて旅行し

たが、この後は、終身大谷大学に教授もしくは名誉教授として在籍しながら、しばしば海外に講演旅行に招かれていくことになるのである。その最初は、昭和十一年四月、ロンドンにおける世界信仰大会 (The World Congress of Faiths in London headed by Sir Francis Youngusband) に、日本代表として出席したときで、その会議後は外務省囑託として (under the auspices of the Japanese Foreign Ministry) オックスフォード Oxford, ケンブリッジ Cambridge, ドウエルハム Durham, エディンバラ Edinburgh をよびロンドン London の諸大学で、禅仏教 (Zen Buddhism) をよび日本文化 (Japanese Culture) について講義した。そしてこの年の秋にはさらに渡米して中 (Central) 東 (Eastern) 部の諸大学でヨーロッパでと同じ題目について講演行脚を続けた。帰国は翌十二年一月であったが、越えて十三年春にはビアトリス夫人が病み、翌十四年七月にはついに不帰の客となったのであった。われわれは大拙の陰にあり、あるいは多年その片腕となって尽したビアトリス夫人の日本文化や仏教を海外に紹介した功績をたたえることを忘れてはならないであろう。この時期に大拙が刊行した和文の仏教研究書には昭和五年に出した『禅とは何ぞや』(昭和二十一年改版、同二十八年創元文庫本、同二十九年角川文庫本) をはじめ殆んど無数といつてよい程、多いのである。それらには主として外人に対し仏教、とくに禅仏教、あるいは日本文化を知らせるための啓蒙書の形で起草した英文の書物の和訳であるものも含まれるが、『燧煌出土「神会録」(影印本) 解説』(昭和七年) 『興聖寺本「六祖壇経」(影印本)』(編) (昭和八年) 公田連太郎と共同校訂の『燧煌出土荷沢神会禅師語録・同六祖壇経・興聖寺本六祖壇経』(昭和九年) 等の禅録の校訂や解説もある。昭和九年に大谷大学の The Eastern Buddhist Society から出した "The Training of the Zen Buddhist Monk" のときは戦後、アメリカで再刊 (republished by University Books, New York, 1959) された。また同年に同所から出た "An Introduction to Zen Buddhism" も同じく戦後、英国ヤーマンで再刊 (republished with foreword by C.G. Jung, Rider and Company, London, 1948. Arrow Books Ltd., London, 1959. "Die Grosse Befreiung, Einführung in den Zen Buddhism-

mus", tr. Felix Schottlander. Leipzig: Curt Weller & Co., 1936. Republished, Zurich: Rascher Verlag, 1956) されてその思想的生命のながさと広さを実証している。それらの点で他にも言及すべき貴重な書が少くないのであるが、一面には大拙の晩年のことにもわたることになるので、いまは右のような代表的な書だけにとどめておく。ただ大拙の書に対しユンクのごときすぐれた現代の学者が序言を付して「大拙禪」の現代思想における意義やその地位を示そうとしていることは注意すべきで、初期に出された "Outlines of Mahayana Buddhism" (1907) に対しても最近アメリカから出された再刊本 (First Schocken Paperback edition, 1963, New York) とはブロン・ワッツ Allan Watts の長文な前言 (Prefatory Essays, 29 pages) が巻頭に付され、それらは内容的に「大拙禪」の今後における研究方向を示唆していることは最も注意すべきである。

大拙の華嚴研究についてはさきにもすでに述べたが、そのはじまりは昭和九年から十一年にかけての大谷大学教授泉芳環と共同での『梵文華嚴經入法界品』の校訂であった。そしてこの仕事の背後には当時すでに故人であった佐々木月樵学長の遺志を継承しようとするものもあったに相違ない。この書物は洋書として出され (The Gandavyuha Sutra, critically edited in collaboration with H. Idzumi. In four parts. The Sanskrit Text Books Publishing Society, Kyoto) その国の内外に学問的に寄与する所が大きかった。大拙の学問はそういう意味で決して禅学だけに局せきせず、むしろ進んで「禪」の現代的解放に志ざし、したがってその思想的教理的背景となった華嚴等の原典究明には生涯かけて努力したのであった。昭和十年に出された "Manual of Zen Buddhism" (The Eastern Buddhist Society, Kyoto. Republished by Rider and Company, London, 1950, 1956. Grove Press, Inc., New York, 1960) も広く内外で読まれて来た「禅学入門書」で、英国でも米国でも再刊されている。昭和十一年出版の "Buddhist Philosophy and Its Effects on the Life and Thought of the Japanese People". (国際文化振興会刊) も翌年すでに英国で改題再刊されてゐる (Revised edition with the title "Buddhism in the Life and Thought of

Japan", published by the Buddhist Lodge, London, 1937)。同種のものでは昭和十三年の "Japanese Buddhism" (Tourist Library: 21. Board of Tourist Industry, Tokyo) や同年の "Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture" (The Eastern Buddhist Society, Kyoto) があり、ことに後者に対しては、オットー・フィッシャー Otto Fischer が独訳 ("Zen und die Kultur Japans", Deutsche Verlags-Anstalt, 1941) の出たことが注意される。日本で『無心ということ』(昭和十四年)とか『禪と日本文化』(同十五年)の名で大衆化された「大拙禪」書(共に北川桃雄訳)は本来そうした英文書中に含まれ、またはそうしたものとして出されたもので、前者には創元文庫(昭和二十六年)、角川文庫(昭和三十年)の両本があり、後者はもと岩波新書本として刊行された(昭和十七年には同じく岩波新書本で『続禪と日本文化』が出る)。大拙の興味は幼少の頃から真宗、つまり念仏の方面についてもあったから、それが『禪と念仏の心理学的基礎』(昭和十二年)や『浄土系思想論』(昭和十七年)となりまた後の時期には『妙好人』(昭和二十三年)の研究書となって現われていく。しかし彼の本領が禅仏教にあったことは争えない事実で、昭和十五、六、七年頃にはとりわけ『盤珪の不生禪』(昭和十五年)、『盤珪禪師語録』(昭和十六年、岩波文庫、校訂)、『盤珪禪の研究』(昭和十七年、古田紹欽共編)、『盤珪禪師説法』(昭和十八年、同上)等の一連の研究書に見られるがごとく、盤珪禪の究明に没頭しているのである。

さて戦局がはげしくなった昭和十九年には、とくに『日本の靈性』と題した書を成し、これは終戦の翌年刊『日本の靈性的自覚』や『靈性的日本の建設』にも続くのであるが、それについては次節のはじめに考察することにする。

四 晩年——「大拙禪」の真義

偉大なる思想家には、つねに時勢の動きに対して達観した所がある。達観というのはもちろん徒らに世間に対して超然として無関心であるということではなく、かえってよりふかく社会生活を理解し、真の指導をこれに対して加え

ようとする人間としての誠実あるを現わすことばである。大拙のごときは多年海外にあり、英米独仏人の實際をよく知っていたから、太平洋戦争というものに対しては内心、余程批判的もしくは絶望的であったに相違ない。前節の最後にあげた『靈性的日本の建設』のごときは、出版は戦後になったが、執筆は激戦中のもので、巻頭にのせた「戦争礼讃」(ラウス・ベリ。魔王の宣言)においても、内容的に見て全くの皮肉、逆説の論で、「……日本人はこれを『御稜威』だと言う。誰の『御稜威』を指すかは知らないが、魔王たる自分から見れば、それは何れも魔王の『御稜威』に外ならぬのだ」(同書一頁)と当時としては相当きわどい論である。この一論の構想も第二次世界戦争勃発直前に発行された英国の『哲学』雑誌の巻頭にマフ(魔王)の名で書かれて居るものからヒントを得て起草したものという。したがって「靈性的日本」とか「日本の靈性化」といっても、決して例の「日本精神」流のそれでなく、かえって日本を世界的水準にまで思想的にも文化的にも解放し高揚させようという趣意のものであった。そこに戦中、戦後に一貫した「大拙禪」の本領と真義を見るべきであった。したがって大拙は、よしアメリカに長時いたとしても、あるいはその後しばしばヨーロッパにわたったとしても、決して日本人として自主的な禅人的伝統的自覚を失わず、むしろ日本とかアメリカとか、あるいはヨーロッパとかいう区別を超えた次元の世界に立って、しかもそれぞれの国や民族をそれぞれの国や民族たらしめる基本的立場をたえず問題にしていたようである。思想的にはそうであるから、戦後はくりかえし「華嚴」の事々無礙法界の道理を随時随処で説き明かしていた。昭和二十六年三月には八十一才の高令でアメリカに渡り、コロンビア大学で「華嚴」の講義をはじめている。その年六月、暑中休暇のため帰国したが、その折、東京大学の文学部でもささやかな講演会があって筆者も出席したが、著書の上に見られたはげしさは大拙の言動にはいささかもうかがえなかった。その頃大拙は、円覚寺内のそれまで長年住んだ正伝庵を引払い、東慶寺山上に松ヶ岡文庫を設立してそこに寝起きしていた。そこには多年蒐集の蔵書に、夫人の蔵書もあわせ、親友の安宅弥吉(石川真人)から基本金を得て松ヶ岡文庫を財団法人とし、書庫、閲覧室等を整備させていた。また同文庫から

英人ブライス R. H. Blyth の協力を得て英文雑誌 “The Cultural East” を発刊していた。それが終戦の翌二十一年のことである。そして昭和二十二年正月の御進講には「仏教の大意」（大智と大悲）を講義し、同年中に同じ名の書目でこれを刊行した。これには仏訳 (“L'essence du Bouddhisme”. Tr. Ivo Rens. Paris. Le Cercle du Livre, 1955) がある。その頃人々は七十五才にして未曾有の敗戦に出会ったこの老翁を訪ねて戦後の精神的立上りについて指導を求めたし「二十一年に出た『宗教について』（務台、柳田と語る）『宗教的信について』（小野、務台、下村と語る）等参照）大拙自身も『宗教と生活』『自主的に考える』（以上、二十二年刊行）等での世間的要求にこたえようとした。やがてさきの『靈性的日本の建設』の「序」（昭和二十年初冬執筆）で近刊を約束されていた鈴木正三道人の『鹽鞍橋』（昭和二十三年校訂、岩波文庫）も出版され、他にもさきの『妙好人』のほか『青年に与ふ』『東洋と西洋』『宗教と近代人』『宗教と文化』（以上いずれも昭和二十三年）等が出されて国内の当面の要求に応じようとした。しかし『神秘主義と禅』（昭和二十二年）『禅堂生活』（同二十三年）のごとき禅関係書も引続き出されてきた。一方、外人向けでは昭和二十四年に “The Zen Doctrine of No-Mind” (The Significance of the Sutra of Hui-Neng (Wei-Lang), Rider and Company, London) が出版され、この書に対しては程なく仏訳 (“Le Non-Mental Selon La Pensée Zen”. Tr. Hubert Benoit. Paris: Le Cercle du Livre, 1952) や独訳 (“Die Zen-Lehre vom Nicht-Bewußtsein”. Tr. Emma von Pelet. München: Otto-Wilhelm-Barth-Verlag, 1957) も出された。また東本願寺のもともとて英文 “A Miscellany on the Shin Teaching of Buddhism” (真宗概要) を、禅生活にひいては “Living by Zen” (三省堂) を同じ年に出したが、後者に対しては英国で再刊 (Republished by Rider and Company, London, 1950) があつた。また独訳 (“Leben aus Zen”. Tr. Ursula von Mangoldt, München: Otto-Wilhelm-Barth-Verlag, 1955) も出た。なおその和訳が北川桃雄、小堀宗柏共訳で『禅による生活』として昭和三十三年、三十五年の各年に刊行された。また昭和三十年には “Studies in Zen” (Reider and Company,

London; Philosophical Library, New York) が英国および米国で出され、その邦訳も『禪の研究』として小堀宗柏が訳者で昭和三十二年に出された。以後ほとんど毎年一冊ずつ禪や仏教関係の英文書が出たが、中には旧刊の再発行のものもある。すなわち、昭和三十一年にはウイリアム・バレット・William Barrett 編で “Zen Buddhism” (Selected writings of D. T. Suzuki, Doubleday & Company, Inc., New York) など、同三十三年には “Mysticism: Christian and Buddhist” (Harper & Brothers, New York; Allen and Unwin Ltd., London) など、同三十三年には “Zen and Japanese Buddhism” (Revised and enlarged edition with the Japanese Buddhism, Japan Travel Bureau, Tokyo) が再刊(初版は昭和十三年)され、次の年には “Zen and Japanese Culture” が、これまた Bollingen Series LXVI として訂正増補の上再発行(Revised and enlarged second edition of Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture. 初刊は昭和十二年本。Pantheon Books Inc., New York. Routledge and Kegan Paul, London) され、内外人の要望に応せしめられた。また昭和三十六年に出された “Zen Buddhism and Psychoanalysis” (Harper & Brothers, New York) はエリク・フロム Erich Fromm とリチャード・ド・トルティーヤー Richard DeMartino との共著であることが注意されねばならない。この類の書としては最後にバーナード・フェリックス Bernard Phillips の編む “The Essentials of Zen Buddhism” (New York: E. P. Dutton & Co., Inc.) が昭和三十七年に同じく国外で刊行されている。一方国内では『東洋的な見方』(昭和三十八年)『親鸞の世界』(曾我量深、金子大栄、西谷啓治三氏との討論)『趙州禪師語録』(以上、昭和三十九年)『東洋の心』(昭和四十年)『大拙じれづれ草』(昭和四十一年)が出され、死後にも『人生いかに生くべきか』(福田恒存、E. O. Reischauer, H. Dumoulin 等との対談)『妙好人浅原才市』が出て、彼が不滅の宗教的生命であることを表示している。まことに古田紹欽氏も語るように道元に比肩し得る偉大な思想宗教家であつたらうし、昭和四十一年七月十四日の東慶寺における密葬で導師の朝比奈京源師が誄として述べたように、羅什にも玄奘にも勝ると

も劣らない仏教界の大恩人であったといわれよう。そういう人が、昭和二十四年以後の約十五年間は、ハワイ大学における東西哲学者大会やクレアモント、イエール、ハーヴァード、コルネル、プリンストン、コロンビア、シカゴ等の諸大学でしばしば仏教、禅、日本文化、あるいは東洋思想について講義し、またヨーロッパにも渡り、ヤスパースやハイデッガーに会い（一九三五）アーネスト・ベンツ教授をも訪れ（一九五四）ている。また中国の胡適とも親しかった。昭和三十五年には九十才にしてインド政府の招請で彼の地に旅行している。郷土が生んだこの近世にも稀な偉大な宗教思想家の真相は、これからこそ改めて究明されていくべきものであろう。いまはまだ主として彼の述作生活の跡を追い、自らのそうした真相探求への予備的考察としたばかりである。大拙の禅は彼独自のものではあった。が、また、それ故にこそその普遍的意義も亦最大といえるものなのである。⁽⁴⁾

註（一）増谷文雄著『鈴木大拙』（昭和三十九年刊）

（二）鈴木大拙述「也風流庵自伝」（『鈴木大拙の人と学問』一六五―一八一頁所収）

（三）昭和四十二年八月二十五日、筆者は第27回国際東洋哲学会議参加者一行にまじってコロンビア大学を訪ね、大拙師の生前を偲び感無量であった。

（四）久松真一博士は昭和三十一年渡米、大拙師と同道、禅の講義をされた折、随行の藤吉慈海教授の質問に答えて“Dr. Suzuki is unique, but we shouldn't try to imitate him. Others should be as strict and accurate as possible in speaking of Zen”と言われた。（“The Eastern Buddhist” New Series, Vol. II No.1. Aug. 1967, p.195 参照）

補註

一九六七年九月十日発行『FAS』誌第61・62号は、也風流庵鈴木大拙、生誕記念碑」の記事を碑の写真に併せて載せた（同誌13〜15頁参照）。碑文「鈴木大拙先生生誕地」は久松真一博士が西田幾多郎遺愛の筆で書かれたもの。建碑式に際し「骨と肉 父母に還して 夕涼み」の句が久松博士から寄せられた。碑石は、高さ約2メートルの黄白色の自然石に、前記碑文を彫った黒御影石をはめこんだものを、別の円形で灰色の台石の上に建てたもの、すべて金沢美術工芸大学矩幸成教授の考案設計である。なお久松博士は大拙一周忌に左の一首を追仰歌として松ヶ岡文庫に献じられた。

遭ふごとに 破顔（ひら）く師叔の 微笑（ほほえみ）は 虚空に満ちて とはに忘れじ